

台湾における日系新宗教の受容の一形態について — 中華民國生長之家の事例: 特にライフヒストリーに注目して —

東洋大学大学院 寺田喜朗

目次

- 1, はじめに
- 2, 先行研究と研究課題
- 3, 台湾の生長の家—台北支部の教団活動の概要と現状—
- 4, 布教者のライフヒストリー
- 5, 受容の様態を規定した要因
- 6, むすび

1, はじめに

「我領台の結果政治、資本、及び教育上本島人在来勢力及び外国勢力の圧倒駆逐が行はれしに拘らず、ひとり宗教に関しては我國民の活動は甚だしく不振にして、本島人在来の寺廟信仰及び外国基督教宣教師の伝道に対して殆んど一指を加ふる能はず、領台後渡来せる我が神道仏教及基督教は殆んど凡て在住内地人とのみ関係し、その活動は本島人生蕃人に及ばないのである」。

矢内原忠雄1929『帝国主義下の台湾』(岩波書店:211頁)

戦前の台湾には多くの日本宗教が進出していたが、当時、その多くは在台邦人を布教・教化の対象に据えた活動を行っていた。そして、その結果、敗戦に伴う在台邦人の引き上げと共に、神道、仏教を始めとする既成教団、またほとんどの新宗教教団の信仰は台湾から姿を消してしまうことになった。

戦前から台湾へ進出していた日本宗教のうち、今日まで教団活動が維持されているのは、天理教と生長の家の二つの新宗教のみである。天理教については、既に黄智慧、藤井健志等が優れた成果を提出しており⁽¹⁾、伝道開始当初から現在に至るまでの教団活動の概要と受容の要因が明らかにされつつある。本発表は、半世紀以上に渡って台湾人に保たれたもう一つの日本宗教である生長の家教団について論じたい。

(1) 管見によると、これまでに発表された台湾における日系新宗教を扱った研究は以下の通りである。

矢野信夫1960「台湾布教史の研究」『金光教学』3、黄智慧1989「天理教の台湾における伝道と受容」『民族学研究』54-3、董芳苑1989「『生長之家』—一個舉足輕重的日本新興宗教」『宗教與文化』人光出版社、藤井健志1990「アジア・オセアニアでの布教(戦前)」井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂、中牧弘允・吉原和男1990「アジア・オセアニアでの布教(戦後)」同『新宗教事典』同、三濱善朗1992「天理教の台湾伝導について」『天理台湾研究会年報』創刊号、藤井健志1992「台湾における日系新宗教の展開(1)」『東京学芸大学紀要』第2部門43、金子圭助1993「台湾に於ける天理教布教伝導の側面」『天理台湾研究会年報』2、藤井健志1993「台湾における日系新宗教の展開(2)」『東京学芸大学紀要』第2部門44、清水榮吉1994「戦後天理教台湾伝道再開前後のこと」『天理台湾研究会年報』3、鄭志明1996「台湾当代新興宗教〈卷之二〉」靈鷲山般若文教基金會國際佛學研究中心、藤井健志1996「台湾における日系新宗教の展開(3)」『東京学芸大学紀要』第2部門47、同1997「同(4)」同48、井上順孝1997「グローバル化のプロセスから見た新宗教」脇本平也他編『アジアの宗教と精神文化』新曜社、五十嵐真子1998「台湾光復後の宗教動向—外来の宗教動向を中心に—」『リトルワールド研究報告』4、拙稿1998「台湾における生長の家の展開」『東洋大学大学院紀要』35、藤井健志1998「戦後台湾における天理教の布教展開(1)」『東京学芸大学紀要』第2部門49、同1999「同(2)」同50、拙稿1999「台湾における日本新宗教信仰者のライフヒストリー」『白山人類学』6、同1999「宗教的回心と文化的コンテクスト—台湾生長の家陳林秀美さんの生活史から」『現代社会理論研究』9。

なお鄭志明の1999『台湾新興宗教現象』南華管理学院は、前掲書と内容は同じ。また中華人民共和国では、1999年に戴康生編『当代新興宗教』東方出版社が出版されている。そこには張新鷹による「台湾的新興宗教」と題された論文が収録されており、台湾の天理教についても若干触れられている。

なお教団刊行物はここには記載していない。

2, 先行研究と研究課題

本発表は、基本的に宗教社会学の立場から新宗教研究の研究史を念頭に置いて論を進める⁽¹⁾。これまでの新宗教研究においては、日系新宗教(以下、新宗教)の異文化受容という研究領域に対して1970年代から蓄積が重ねられ、様々な成果と共に研究仮説も析出されている。今回はこのうち、中牧弘允、島蘭進の論考を紹介し、その後、藤井健志の研究から台湾における新宗教の活動の概略を紹介したい。

中牧弘允は、生長の家の本国を上回るブラジルにおける発展の要因として以下の4点を指摘している⁽²⁾。

- ①教義が混淆的でブラジル人の嗜好にあうこと。
- ②ポルトガル語部と日語部の並立的組織化を巧妙に行っていること。
- ③カトリックに極めて寛容な態度をとっていること。
- ④宗教ではなく人生哲学として打ち出していること。
- ⑤病気なおしを伴う倫理宗教として人気を集めていること。

これは日本本土よりも多くの誌友(信者)を獲得するに至ったブラジルでの布教の成功の要因をマクロな視座から捉えようと試みた研究仮説である。検証作業は行っていない。

島藪進は、ブラジルのみならず、ハワイやカリフォルニア、東南アジア諸地域、オーストラリア、メキシコ等のフィールドから提出された先行研究を整理する作業から、やや議論を拡げて新宗教が異文化の地で受け入れられる(現地側の)要因として以下の二つの仮説を定式化している⁽³⁾。

- ①日本の文化への好意的眼差し、あるいは文化的・政治的条件。
- ②社会経済的変動の中での新たな宗教のニーズの発生。

上記の①は、巨視的に見れば伝統文化の相対化という事態が背景にあり、それまでの(支配的文化の)独占的権威が失墜するという「文化的、政治的条件」が日系新宗教の受容の要因として考えられる、というものである。②は、工業化、都市化によって伝統的共同体の生活原理から解放された個人の出現が、親密な繋がりと相互扶助の精神を重んじる日系新宗教の教えの受容の要件として考えられる、というものである⁽⁴⁾。

さらに島藪は、異文化へ進出した宗教の特徴とその魅力として以下の4点を指摘している。

- ①異文化コミュニケーションの困難がほとんど伴わない単純明快な呪術的实践が信仰生活の要をなしている宗教。
- ②生活の場に即した具体的・実地的な倫理的教説とその指導を備えた宗教。
- ③特定の文化のもつ微妙なニュアンスにさほど拘束されない、読みやすく理解しやすい翻訳教義文書を準備する体系的・理論的な言説を備えた宗教。
- ④既存の宗教伝統、あるいは多宗教との並存という事態に対処できるまとまった言説と積極的な対応策を用意している宗教。

このうち、①③④の特徴・魅力を備えた宗教の例として生長の家が挙げられている。

なお島藪は、自らのフィールドから議論を立ち上げているわけではなく、文献研究から以上の仮説を導き出している。

以下、中牧と島藪が提出した受容仮説が、台湾における生長の家の受容のケースにも当てはまるかどうか、ということをもとに基本的な研究視点として検討を加えていきたい。しかし、島藪が提出した現地側要因の②については議論がやや抽象的であるので、戦後の台湾における社会変動と宗教の関係を論じたD.K.ジョーダンの議論を参考してみたい⁽⁵⁾。

D.K.ジョーダンの論考は、戦後から1980年代にかけての台湾社会の変動と宗教、特に民間信仰の関係を論じたものである。ジョーダンが戦後における主要な変化として指摘しているのは以下の4点である。

- ①財産の増加。
- ②政策の変化。
- ③教育の上昇。
- ④移動の増加。

①については、生活水準の上昇に伴い、農村地帯ではかつて見られた小さな寺廟が姿を消し、100年前には考えられなかったような壮麗な寺廟が建立されている事態などが報告されている⁽⁶⁾。②では、土地改革と公共医療機関の整備、そしてそれに伴う霊媒や占い師による治病行為への規制といった事態が論じられている。土地改革によって伝統的な寺廟や僧院の財産が減少し、また、政府の指導によって民間宗教者は治病行為の対象を身体的なものから精神的なものへシフトさせている事態が報告されている。③では、リテラシーの増加に伴い、合理的・科学的な知識や思考が広まり、また宗教的なテキストや解説書の増加によって宗教的知識が世俗社会に広まっている事態が報告されている。④では、交通や情報伝達の発達によって伝統的な地縁共同体が崩壊し、その結果、地方意識の希薄化が起こり、地縁的な広がりを超えた宗教施設への参列者が見られるようになった事態が報告されている。

ジョーダンの論考は、戦後の台湾における多層的な社会変動が既成の宗教伝統へどのような影響を与えているかを論じたものである。島藪の現地側要因②については、ジョーダンが指摘する変化を下位的な分析視点として考えていきたい。

なお台湾における新宗教の展開については、藤井健志が「布教活動の責任者」からの聞き取りをもとに概況を描き出している⁽⁷⁾。藤井は、立正佼成会、霊友会、天理教、創価学会、世界救世教、真如苑、生長の家、という教団を扱っているが(若干、本門仏立宗、日蓮正宗信徒弘法會にも触れている)、1992～1996年の研究はエクステンシブな記述スタイルを採っており、その後は天理教を対象にしたインテンシブなスタイルにシフトしている⁽⁸⁾。

まず、新宗教の台湾布教の現状について藤井の研究から概況を示しておきたい。

教団名	天理教	生長の家	創価学会	真如苑	世界救世教	立正佼成会	霊友会
布教開始年度	1897	戦前 ?	1960頃	1967	1960年代	1970	1977
活動の再開・活性化など	1967	1955 ?	1970年代末	1985	1974	1985	
信者数	10000人	2700人	35000人	千+千世帯	4200人	1000世帯	6000人
調査年度	1991.8	1996.4	1996.4	1996.4	1992.7	1991.8	1992.8
主な使用言語	台湾語	台湾語	北京語	北京語	客家語	台湾語	台湾語

上記のように信者数が最も多いのは創価学会であり、生長の家は活動期間が2番目に長いにも関わらず教勢はあまり振るっていない。

藤井は、これまでの新宗教の海外布教に関する研究が、「日系移民社会が存在する地域」と「日本人、日系人がいない地域」という二つのカテゴリーの地域で進められており、台湾や韓国は、かつて日本の植民地であった「第三の地域」であるため、従来の研究視点では上手く捉えられない事態があることを指摘している⁽⁹⁾。また「台湾の場合、特に天理教と生長の家は戦前との関係を考慮しないと、戦後の活動を理解することは出来ない」ことを指摘している⁽¹⁰⁾。

藤井が台湾における新宗教の受容の研究を進めていく上で重要視する点は以下の2点である。

①省籍と世代による使用言語の違いからくる対日観の問題。

②宗教統制を巡る法制上の問題⁽¹¹⁾。

①は、1895～1945年における日本の植民統治、特に1937年以降の「皇民化運動」の影響の問題を特に念頭に置いており、②は、1949～1987年における戒厳令の問題を指している。周知のように戒厳令下では、思想・信仰の自由、さらには集会の自由は制限されており、特に国民党政府は日本的な思想、宗教に関しては厳しい監視を行っていた。創価学会は1963年に政府から解散命令を受けている。1980年代初頭から規制はゆるみ始め、各教団の活動はこの時期から活発化している。この宗教統制の問題が各教団の組織形態とライフコースにまずどう影響を与えたのか、という点は考慮に入れねばならない。

また藤井は、「檀家制度」がなく、社会レベルでの、人々と宗教の関わりが(日本とは)「本質的に」異なる「台湾独特の宗教的環境」の問題、そして「宗族のような中国的血縁関係」が新宗教の展開に大して持つ意味の分析、も検討していくべきだと述べている⁽¹²⁾。

(1) 宗教社会学の立場と研究史については、宮家進ほか編1986『リーディングス日本の社会学19 宗教』東京大学出版会、拙稿2000『20世紀における日本の宗教社会学』大谷栄一ほか編『構築される信念—宗教社会学のアクチュアリティを求めて—』ハーベスト社等を参照のこと。新宗教研究については、井上順孝ほか1981『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣、井上順孝ほか編1990『新宗教事典』弘文堂等を参照のこと。

新宗教の異文化受容についての研究は、柳川啓一・森岡清美編1979『ハワイ日系宗教の現況と展開』東京大学宗教学研究室、同編1981『ハワイ日系人社会と日系宗教』同の発表前後から本格的にスタートする。代表的な成果としては、井上順孝1985『海を渡った日本宗教』弘文堂、中牧弘允1986『新世界の日本宗教』平凡社、同1989『日本宗教と日系宗教の研究』刀水書房、前山隆1997『異邦に日本を祀る』御茶の水書房等が挙げられる。また、前山隆1982『千年王国論としてのカチ組の成立』(同『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会)、西山茂・藤井健志1981『ハワイ島日系社会における天照皇大神宮教の伝播と展開』(前掲[柳川啓一ほか編1981])は、中でも優れた成果として評価されている。日系新宗教の海外布教の現状と研究成果は前掲[井上順孝ほか編1990]所収の中牧弘允ほかによる「新宗教の海外布教」(607-657頁)で整理されている。なおその後のアジア地域における成果を網羅したものとしては前掲[井上順孝1997]論文を参照のこと。

(2) 1991『日本宗教の現代的展開』佐々木宏幹編『体系/仏教と日本人12/現代と仏教』春秋社。なお中牧は、生長の家のブラジルでの展開を「エビデミック宗教」として分析しているが(「エンデミック宗教とエビデミック宗教の共生」1993『宗教研究』296)、これは議論が大きすぎるので参照しない。井上順孝の「グローバル化」の分析も議論が大きすぎるのでここでは参照しない(「グローバル化と日本宗教の海外進出」1988『東洋学術研究』27-31ほか)。

(3) 1992『日本の新宗教の異文化進出』『現代救済宗教論』青弓社。なお島菌は、以下の論点とは別に、呪術的現世救済信仰を有し、自助努力を推奨する「現世志向の宗教」である点も、日本新宗教が海外で受け入れられる魅力の一つとなっていると論じている。

(4) 新宗教が、所与の共同体の紐帯原理を色濃く残した農山漁村ではなく、都市を舞台に発展していくことは新宗教研究では既に定説となっている。高木宏夫は、1959『大衆組織としてみた新興宗教』『中央公論』6月号においていち早くこの問題を扱っているが、実証的な成果としては、鈴木広1970『創価学会と都市的世界』『都市的世界』誠信書房、石井研士ほか1990『新宗教の展開/地域的ひろがり』前掲[井上順孝ほか編]等を参照のこと。

(5) David K. Jordan "Changes in Postwar Taiwan and Their Impact on the Popular Practice of Religion" in Stevan Harrell and Huang Chun-chieh eds. *Cultural Change in postwar Taiwan*, Westview Press 1994.

(6)しかし一方で、都市部では地価の高騰によって宗教施設がアパートやコンドミニウムの一室などに追いやられ、それが特定宗派の信仰や個人的な信仰心の醸造、あるいはコミュニティの共同祭祀を妨げる結果となっていることも指摘されている(*ibid.* p141)。

(7)前掲[藤井1992; 1993; 1996; 1997]。

(8)前掲[藤井1998; 1999]。

(9)前掲[藤井1996; 49頁]。

(10)前掲[藤井1996; 53頁]。

(11)前掲[藤井1992; 42-44頁]。

(12)前掲[藤井1992; 50頁]。

なお台湾の「新興宗教」については鄭志明が積極的に研究を進めている。彼も「一九四五到一九八〇年代初期」における「戒嚴文化的影響」の大きさを強調している。

ただし鄭の述べる「新興宗教」とは、台湾において光復後に発生した宗教群のことである。鄭は、伝統的な民間信仰との違いを、教義や活動、組織が比較的明確になり、教祖やリーダーを中心に集団的活動を行っているところに見いだしている。「新興宗教」の発生と活動の活発化には、戒嚴令解除が大きく影響しているとされる。前掲[鄭1996; 24頁]。

3, 台湾の生長の家—教団活動の概要と現状—

1, 生長の家について

生長の家は、谷口雅春(1893~1985)によって創唱された「万教帰一」を唱える習合宗教である。1930年3月における『生長の家』誌発刊から教団活動はスタートしている。1934年に神戸から東京へ本部を移し、組織が拡充され、1940年頃には数十万の誌友(会員)を獲得するに至っている⁽¹⁾。『生長の家』誌の巻頭には、「心の法則を研究しその法則を实际生活に応用して、人生の幸福を支配するために实际運動を行う」ことが宣言されている。ニューソートのホルムスの思想や大本の言霊学、スピリチュアリズムや精神分析学、ベルグソニズム、自然哲学など多種多様な思想伝統を総合した谷口の教えの骨子は、思考が現実を変えるという信念、汎神論的な生命主義、人間の神聖性の強調、唯心主義、楽観主義、積極主義などといった言葉で要約できる⁽²⁾。その教えは『生命の実相』(全40巻)、『真理』(全11巻)、『生命の教育』等の教義書の他に『生長の家』、『白鳩』、『光の泉』、『理想世界』等の定期刊行物で知ることが出来る。実践活動は、生長の家の書籍を読むこと、合掌正座して約10分間の「神想観」と呼ばれる行を行うこと、等があり、集団活動としては、誌友(会員)が集って書籍を輪読する「誌友会」の実践が奨励されている。現在の公称信者数は日本国内で87万人を数えている⁽³⁾。

また、聖經『甘露の法雨』の巻頭神示に「皇恩に感謝せよ」という言葉が掲げられていることに象徴されるように、天皇と皇室を賛美する教えが説かれている。「万教帰一」を唱える普遍主義的な教理体系を備えた教団である一方、国内では、1960~1980年代にかけて、「現行憲法の無効化」、「帝国憲法の復元」、「天皇国日本、正統憲法実現」を目標とした様々な政治活動を展開させてきた。「日本国民会議(1957~)」、「日本を守る会(1974~)」、「日本を守る国民会議(1981~)」などといった様々な右翼系政治団体連合に参加し、並行して婦人部を中心に「優生保護法改正」の署名・請願運動に積極的に取り組んできた⁽³⁾。つまり、「天地一切のものと和解せよ」「天地万物に感謝せよ」という心なおしの原理に基づいた病気治し(「物質はただ心の影」「心に健康を思えば健康を生じ、心に病を思えば病を生ず」という病因論から指導される)、家庭調和の指導だけでなく、社会・政治参加への意識も強かったのが谷口在命中の教団活動の特色といえる。

(1)生長の家の教団成立史は、生長の家本部編1980『生長の家50年史』日本教文社を参照のこと。

(2)谷口の思想を追った研究としては、島藺進1988『生長の家と心理療法的救いの思想』桜井徳太郎編『日本宗教の正統と異端』弘文堂、同1994『神と仏を越えて—生長の家の救済思想の生成』今野達ほか編『岩波講座日本文学と仏教8 仏と神』岩波書店などがあるが、特に重要な研究として小野泰博1995『谷口雅春とその時代』東京堂出版を挙げておきたい。

(3)日隈威徳1983『生長の家の『教義』と運動—復活する"戦犯宗教の素顔"—』『前衛』6

2, 台湾の生長の家の歴史

戦前の台湾における生長の家の活動は、聞き取りからも資料からも上手く再現できない⁽¹⁾。董芳苑は、生長の家の台湾伝道が「民國廿四年(1935)年」に始まり、「日本僑民」の間で広まると述べている⁽²⁾。藤井は、『新宗教事典』の記述においては生長の家の台湾布教は「昭和11(1936)年以降」と述べているが⁽³⁾、後の論文においては、「戦前」に「台北、台中、新竹、基隆など」で誌友会が開かれていたという表現に改めている⁽⁴⁾。

教団刊行物の『白鳩』誌(1967年10月号、56-61頁)と『感謝の奇跡』(谷口清超、日本教文社、1974年、135頁)には、戦前の台湾において台湾人から勧誘され、入信した日本人の事例が記載されている。白鳩誌のものは「昭和8

(1933年)、『感謝の奇跡』は「昭和15(1940)年頃」と記されている。しかし、その教化した台湾人がいつ頃、どのような経緯で入信したのかは記述がない。教団本部が編纂した『生長の家50年史』には、戦前における台湾の活動には一切言及がない。1937年3月分の『特高月報』(166頁)には、生長の家本部で開かれた第9回指導者講習会の631名の中に台湾からの参加者があったことが記されている。

いずれにせよ、台湾における生長の家の最も早い時期の信者がどのエスニックグループの人々であり、いかなる経緯で入信したのかは、わからない点が多い。筆者の聞き取りでも、戦前、基隆、台北、新竹、台中、高雄で誌友会が開かれていたことは確認されたが、他の地域でどのような広がりを見せていたのかは依然不明のままである。以下、口述資料から戦後の展開を概観する。

日本の敗戦とその後の動乱、治安の悪化等により、戦後の数年間は誌友会活動は頓挫していた。これが再開されたのは、1950年代半ばである。再開させたのは、王承通、李松蒲という2人の人物であった⁽⁵⁾。それぞれが師範学校卒、工業学校卒のエリートで、当時、王は教師、李は建築事務所を経営していた。王承通は誌友会活動が頓挫していた期間に谷口雅春へ手紙を送り、その後、2人の間では手紙のやり取りの形で交流が続いた。谷口の下へ送られてくる台湾に住む戦前からの読者の手紙が、その都度、王へ紹介されることによって初期ネットワークは形成された。また、谷口経由で知った戦前からの読者と共に、王と李は個人的な知り合いを誘い合い、誌友会を継続させた。勧誘を行ったのは、職場の同僚や学校の同窓等であり、2人の親族等への血縁的な広がりほとんど見られなかった。やがて王が鴻儒堂と新高堂という日本語書店に流通経路を開発する。ここで再び生長の家の書籍は不特定多数の台湾島民の目に触れることになった。なお、この時期は宗教団体としての活動を名乗ってはならず、また、政府の監視を恐れ、1960年代まで不定期で場所を変えながら定期的な参加者は10人程度という規模で誌友会は継続された。

日本本部の支援が得られず、私的な勉強会の形で継続されていた誌友会活動が、大きく拡大し、組織的な整備が行われるようになったのは、1960年代の末からのことである。王、李等は、『幸福的生活』という雑誌を季刊で発行し始める。これは誌友の増加を企図して発刊されたものであり、既刊の生長の家の刊行物を台湾語に訳した内容であった。数年後に洪徳馨という人物も『生命之光』という雑誌を発刊する⁽⁶⁾。これはより若い世代への布教を企図したもので、より現代語に近い文章で編まれていた。1970年前後に法光寺という仏教寺院を借りて初めて数十名規模の誌友会が開かれる。この誌友会の成功後に誌友会参加者は大幅に増加した。『幸福的生活』『生命之光』は、誌友やその知り合いへの配布と共に図書館や病院へも寄贈・配布された。やがて高雄をはじめとする地方都市へも教線が拡大し、邱利貞によって『白鴿子』という婦人向けの新しい雑誌も創刊された。

1984年に台北市所轄の地方性研究団体、社団法人「台北市生命実相研究会」に認可され、組織の整備が進められる(数年後に台中、高雄も認められる)。この時点では、無試験で本部から講師資格を認められていた王、李、洪の3名以外に18人の地方講師の資格取得者がいた。また台湾における初めての練成会(合宿形式で行われる教団行事)も開催される。当初は50人ほどの参加者であったが、3回目には150人の参加者を集めた(1997年春の時点では406名の参加者を集めている)。教団刊行物は、1985年に『幸福的生活』が休刊し、代わって月刊誌『生長之家』が創刊された。後に『白鴿子』も休刊し、台湾生長の家の刊行物は『生長之家』誌に一本化されている。『生長之家』誌は当初2000部程の出版部数であったが、1992年頃には3000部を越え、1995年時は5500部を刊行している。またブラジル教化で大きな実績を上げた日本国際本部の本部講師、徳久克巳が往台を始める。『生命之光』を刊行していた洪徳馨と彼のシンパは「生命実相研究会」の活動には同調せず、独自の教団活動を行っていた。

1992年に内政部所轄の全国性宗教団体、社団法人「中華民国生長之家」への認可を受ける。これによってさらなる組織の拡充が図られ、また日本本部の下位組織という教団における正式な位置づけがなされた。ここから「中華民国教化総長」として日本人本部講師(二代目の大下貞雄)が常駐することになる。中華民国生長之家は、15人の理事会と5人の常任理事によって中華民国政府に社団法人団体としての活動を申請しており、教化部として白鳩会、青年会、友愛会(日本の相愛会)、講師会が組織されている。そしてこれらの組織の各会長、そして理事長の5者によって五者会議が組織され、信者の指導に当たっている。理事会は2年に1度の会員による選挙によって選出される。

また聖使命会費の徴収が始まり、正確な会員数も把握されることになる。1994年1月は約1600人、1995年11月には2500人を越え、1997年7月には2992人、2000年8月には3500人を数えている。また現教化総長大下貞雄の指導のもと、地方講師の受験が奨励され、1994～1997年の期間だけで123人の地方講師が誕生した。また、日本の国際本部は、神想観を始めとする教団儀礼について、日本語による神道式のやり方を放棄し、中国式のやり方を導入することを決定した。また、教団活動で使用される書籍群も国際本部によって訳出された北京語の翻訳文のみを使用することが奨励されることになった。教えの翻訳も「皇恩に感謝せよ」という日本的(皇室賛美的)な谷口の記述が、「要感謝國恩」(傍点筆者)というように書き換えを含んだ翻訳がなされており(『七つの灯台の

点灯者』の神示」L18)、生長の家の日本的要素は年々払拭されてきている。

- (1)井上順孝ほか編1996『新宗教教団・人物事典』の「生長の家」の項目(152-154頁)参照。
- (2)拙稿[1998]でも述べたが、台湾における生長の家の教団活動についての文献資料は非常に限られており、データの多くは聞き取り調査によって得られたものである。後に述べる王承通等の初期指導者は、(戒厳令下における)政府の規制・検挙を恐れ、1984年に「生命実相研究会」として社団法人に認可されるまで会費の徴収はおろか、会員名簿も作っていなかった。以下のデータの多くは、筆者の1996年9月3日～10月3日、1997年3月4日～4月9日、8月21日～9月11日、1998年7月26日～8月3日、1999年8月26日～9月4日、2000年8月19日～28日における現地調査によって得られたものである。前掲、[拙稿1998]論文ではより詳しい記述を行っているので詳細はそちらを参照のこと。
- (3)前掲、[董1989]、69頁。
- (4)前掲、[藤井1990]、612頁。
- (5)前掲、[藤井1996]、14頁。
- (6)王承通と李松蒲、洪徳馨の3名については実名での上記が不可欠なため、未面接(全員亡くなっている)にも関わらず実名表記を行った。王承通は前掲[生長の家本部編1980]に台湾人で唯一名前が記載されており、李松蒲は前掲[董1989]に名前が記載されている。
- (7)藤井は匿名ながら洪の活動にも触れている。前掲[藤井1996]を参照のこと。

3. 中華民国生長之家伝導教会の現状

発表者は1996年9月3日～10月3日、1997年3月4日～4月9日、8月21日～9月11日の期間、台北市内における教団活動への参与観察を行った。以下、毎週火曜に錦州街の本部(当時)で開かれていた誌友会、毎週木曜に中山北路2段で開かれていた誌友会、毎週金曜に王恵美宅1Fで開かれていた『生命の実相』輪読会、毎週土曜、同じ場所で開かれていた媽媽教室、木曜の夜の青年会(錦州街)の概況を示す。また年に2度開かれる(中華民国生長之家伝導教会の最大の行事)練成会は、97年春、高雄において開催された第14回大会に参加させていただいたのでその概況を示す。

1) 火曜の誌友会

毎週火曜の2時～4時の時間帯に錦州街の本部(当時)で開かれている。特定の講師は立たず、毎回各誌友の体験談を聴くことを中心に活動は行われている。参加者は20～30人。参加者は老年女性信者がほとんどで、たまに若い信者も数名訪れる。この誌友会は王承通宅で開かれていた最古の誌友会が継続しているものである。調査者が参与観察させていただいていた期間は、陳楊金枝(82歳、第2回目の試験で地方講師となっている)が司会を行っていた。

活動は台湾語で行われている。しかし途中で日本語が所々混ざる。活動内容は他の集会と比べて定型的ではなく、体験談の発表も3人目以降はその場の雰囲気決められていた(一日2～4人が話す)。調査者も2度話をさせられた(当然体験談は話せないで、自己紹介と誌友会その他の感想を述べた)。各話者が話し終えたり、話の中でうけることをいうと拍手が起こる。うけることとは、1、私は、～という風に生長の家で救われた、あるいは、～というように感謝の教えは大事だ、といった教団賛美の言葉か、2、～というようにこれだけ私は頑張っている、あるいは、～という風に知り合いの状況が好転している、といった活動報告のどちらかで、話される内容と形式はかなり定型化されている印象を受けた。

進行もその場の任意で臨機応変になされ、神想観その他の儀礼も簡略化して行われていた。ただし笑的練習一笑いの練習は毎回行われていた。

また誌友会の後には必ずピアノを囲んで唱歌が歌われていた。ここでは(教団の歌も歌われるが)戦前学校で習った文部省唱歌が好んで歌われていた。参加者の3分の2程度の人々が毎回残り、合唱を楽しんでいた(20分くらい)。活動中にはお菓子とお茶が配られ、飲み食いしながら話は聞かれる(調査者もお菓子は2回だけ持参した)。また遠足や小旅行の計画も出される。こういった娯楽行事は定期的実施されているようだ。

2) 木曜の誌友会

中山北路2段で毎週木曜の2時～4時の時間帯で開催されている。台北支部長(当時)の陳林秀美が中心となって活動は行われている。この場所で誌友会が始まったのは1996年からである。毎回10～20人が参加する。参加者はやはり老年女性信者が中心。火曜の誌友会と重複する参加者が多い(本部とは200m位の距離)。

活動は台湾語で行われる。しかし日本語が混ざる(調査者が参加した8回は、気を使っていたが話しは日本語の解説を付けて頂いた←こちらが希望したわけではない)。誌友会のフォーマットは決まっており、「実相」額への拍手と礼、「実相・完全・円満」の合唱にはじまり、約1時間の陳林秀美による講話、5分間の休憩(ここでお菓子とお茶を飲

む)、約40分かけての甘露の法雨の朗読(台湾語)、神想観(日本語)で終了する。会の最中は私語や雑談が多く、調査者が参加している際は必ず毎回、講話の途中で誰からか話しかけられた。火曜の会場より狭い会場だが、火曜同様に遅刻してくる参加者が多い(周囲は全く気にせず、とがめる雰囲気はない)。ここでも拍手がよく飛び交う。

陳林が講話で話す内容は、日本の『生長の家』誌や『理想世界』『白鳩』等の雑誌の記事についての紹介や彼女が講演、指導に行った支部で聴いた体験談の紹介が主で、調査者が参加し始めた当初は生長の家の教えの講義のようなものを話していただいた(←調査者の要望によるものではない)。参加者も皆さんベテランなのでそのときは複数名の方が調査者に講義をして下さる格好になった。

誌友会終了後は毎回必ず誰かに話しかけられ、20分ほど雑談(と聴き取り)をした(火曜の誌友会も金曜の輪読会もそうだが、会終了後には日本語話者の若者である僕に興味があったらしく必ず誰かに話しかけられた)。また毎回参加者とその家族の名前が黒板に書かれ、「実相・円満・完全」が神想観の後祈られた。

3) 金曜の『生命の実相』輪読会

王承通の自宅の1階(教室になっている)で毎週金曜の2時～4時の時間帯で開かれている。王恵美が講師を務める。1年に1冊のペースで読み進められており、1985年に始まったので、1997年の時点では12巻を読んでいった。毎回15～25人が参加する。参加者は女性老年信者が中心。やはり火曜の誌友会と重複して参加する人が多い(本部から200m位の距離。以前はここを本部としていた)。

活動は約20分かけた神想観(日本語)から始まる。その後、4時まで日本語の『生命の実相』についての講義が台湾語を交えた日本語で行われる。お茶とお菓子は始めに配られる。講義のやり方は『生命の実相』をまず参加者に朗読させ(日本語)、その内容を王恵美が解説するという順序で行われている。朗読は小学校の国語の時間と雰囲気が似ており、朗読者が間違った読みをすると全員で間違いを訂正する。この集まりは他の集まりに比べ私語が少なく、講義の内容にみんな集中して聴き入っている様子だった。参加者は既に地方講師の資格を得た人も多い。質問や意見は随時行われていた。小学校の国語の授業と大学の講義を足して割ったような印象だった。

4) 土曜の媽媽教室

『生命の実相』輪読会と同じ場所で毎週土曜の2時～4時の時間帯で開かれている。曹宇が講師を務める。輪読会とだいたい同じ時期に始まっている。この集会在中華民國生長之家の活動の中では最も参加者が多く、毎回50人以上の人が参加している(土曜ということも関係している)。教室の中に入れない人も出る。

活動の順序は上記の輪読会と同じ。ただし講話は全て台湾語と中国語(北京語)で行われ、日本語は使われない。参加者も(重複して参加する)老年信者だけでなく、中年の信者も多い(全て女性)。曹宇は以前、ラジオの(人生相談のような)番組で話をしていたこともあり、1994年には、生長の家の教えに基づく夫婦関係についての著作『幸福の泉』を出版した(ラジオで話したテープも販売された。1500本ほど売れたそうだ)。彼女の話(生長の家の講師としてではなく)を聴きに來る目的の参加者が多い印象だった。曹宇ははきはきした口調で講話を行っており、参加者の私語は余り見受けられなかった。講話を聴く目的以外に、彼女のもとへ夫婦や家庭の相談を持ちかける人も見受けられ、会の雰囲気としては生長の家の教えを学びに來るといよりも夫婦問題についての權威である曹宇の話をお聴きに來る集まりという印象が強かった。

5) 木曜夜の青年会

火曜の誌友会と同じ錦州街の本部で毎週木曜の午後7時～9時の時間帯で開かれている。台北地区の青年会長である周雲郷(47歳女性)と教団職員でもある陳柏宏(34歳男性)によって運営されている。参加者は調査者が参加した中で最も多かったのが9人、少なかったのが5人。固定メンバーは上記の2人を含めて3人で、なかなか恒常的な参加者が定着していない印象を受けた。

活動は、参加者が職場や友人関係などの悩みを出し合い、みんなでそれについて話し合うというやり方で行われていた。参加者は20代～40代の男女で、毎回話し合うトピックは異なり、周が司会を行っていた。周・陳共に地方講師の資格を得ているが、教えを諭すというより、教えに基づいた自分の意見を述べるというスタンスで発言は行われていた様子だった。大学の自主ゼミか文化系サークルのような印象だった。

行われる儀礼行為も調査者の訪台毎に替わっていた(笑的練習や聖經読誦は、1回目の調査の際には行われていたが、2度目の訪台の際にはなかった)。しかし神想観だけは継続して行われており、陳に主導されて20分ほどの時間をかけて正しい姿勢で行われていた。

6) 錬成会

1997年春の錬成会には計406名が参加した(調査者と調査者の友人2人もカウントされた)。従来200名前後の参加者だったらしいが、ここ2年ほどで急増している。錬成会の前には目標参加人数が設定され、幹部をはじめとする各信者は勧誘に奔走した。台北からの参加費は4000NT(≒16000円)で、場所は高雄の青年活動中心(セミナーハウスのようなところ)、2泊3日の日程で行われた(食事つき)。初日は早朝にバスに乗って出発し(正午から始まる予定—台北からの参加者は渋滞に巻き込まれて5時間ほどの遅刻—)、最終日は午前中までの行事を終え、正午にやはりバスで台北へ戻った。初めての参加者もかなりいたようだ。台湾語と中国語(北京語)で講話は行われ、2日目の夜の浄心行、最終日の神想観、奉仕活動(清掃)を除くと講話の受講が活動の中心だった。東京国際本部から派遣された曾福人による父母への感謝についての講話の際には、多くの聴衆が嗚咽を漏らすという光景も見られた。おおむね参加者は満足して帰っていた様子だった。錬成会は清明節という(日本のゴールデンウィークにあたる)連休期間中に開催された。子供連れの参加も多く(子供は外で遊んでいた)、大学生の参加も十数名見られた。中高年女性信者がやはり多数を占めていたが、上記の誌友会や講演会の際より参加者はバラエティに富んでいた印象を受けた。

4. 台北市、伝導教団本部とその周辺の誌友会への参加者

発表者は、1997年3月13日(木曜)、21日(金曜)、25日(火曜)に、1)~3)の誌友会(重複している人が多い)で質問紙を配布させていただき、30部を回収させていただくことが出来た。以下、台北支部の活動の内実を知る手がかりとして数量的には少ないが、有効な回答の分類を紹介したい。

年齢	62~65歳	66~70歳	71~75歳	75~80歳	81歳以上
女性	3人	11人	6人	6人	2人 (一人未回答)
男性			1人		

最も若いのは62歳、(1936年生まれ)のこの彼女が小学校(公学校)2年生のとき、日本は敗戦している。つまり彼女は小学校の1年間しか日本語教育は受けていない(1945年は殆ど授業は開かれていない)。66歳は、小学校(公学校)6年の時に敗戦を迎えた人々であるので、つまり、この3つの誌友会に参加している人々は、日本教育を受けた経験のある世代の人々であることが看取できる。

最終学歴	小学校	中学	高等女学校	高等科	鉄道学校?	
女性(本人)	4人	3人	10人	4人	1人(男性) (8人漏れ)	
配偶者	2人	5人	6人	2人	2人	2人

記載漏れが多いが、この世代にあつては学歴が驚異的に高い人々のサークルであることが看取できる。1942年度における台湾人の初等教育への就学率は、54.10%であり、1943年は60.95%である。1943年から初等教育の義務制は施行される。しかし、中等教育機関への進学者は100人に1人という割合である。なお当時の台湾人の高等女学校在籍者は、1932年の段階で台湾人の学齢児童数に対して0.12%であり、1940年度が0.17%、1943年度が0.18%である⁽¹⁾。このコーホートで初等教育以上の教育を受けている人々がかなりの割合で存在するのは、非常に学歴的に高く、階層的にも高いサークルであることが伺える。

何年日本語を習ったか	6年未満	6年間	8年	9年	10年	11年	12年
	2人	7人	5人	3人	4人	1人	2人(6人漏れ)

関連する質問だが、日本語を受けた教育年数である。当時としては6年以上習っている割合が多い。

	5年前未満	～13年前	～20年前	～30年前	～40年前	それ以上
教団を知った時期	2人	12人	6人	4人	5人	1人(55年前)
教団に入信した時期	3人	15人	7人	2人	2人	(←1人記載漏れ)

13年前とは、生命実相研究会が発足する年である。非合法下の厳しい活動状況の下で信仰活動を続けてきた古参信者が多いサークルであるということが看取できる。

教団を知ったきっかけ	友達から=4人 娘から薦められた=2人 母親から薦められた=1人 姉または妹から=4人 李松蒲先生から=1人 陳林秀美さんから=1人 お花の先生から=1人 道で出会った人=1人 本を読んで=3人 講演会で=2人 その他(病気・悩み・子供)=10人
------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

人づてが多いが、サンプル数が少ないので傾向性を指摘することは控えたい。

教団書籍を何冊くらい持っているか	20冊未満 20～30冊 31～50冊 51～70冊 70～100冊 100冊以上
	1人 4人 4人 5人 3人 8人

一月に何回、 教団に行くか	2回 3回 4回 4～6回 6回 8回 12回 14回 16回 17回 20回
	1人 1人 6人 2人 2人 2人 1人 1人 6人 1人 3人

教団の教えの受容度と参加の度合い、つまり信仰の熱心さを調べようとして聴いた項目である。かなり熱心に信心されている方が多いことが看取できる。教団行事には重複して参加している。補足として下の質問。

教団から家は近いか	はい いいえ バスで30分=1人 バスで50分=1人 車で40分=1人
	9人 15人 13kmくらい=1人 車で20分=1人

教団信者と集会・行事以外にも会うか	よく会う それほど会わない 全く会わない
	15 11 1

信者の方々の日常行動と人間関係への質問である。主観的な接触頻度は高い。高齢日本語族の社交サークルとしても機能している様子が看取できる(日本語が読めますか、の質問には全員がはいと答えている)。

他の家族も入信しているか	娘=5人 母親=2人 妻=1人 主人=2人 家族全員=3人 いいえ=11人
--------------	------------------------------------------

信仰歴が長い割合に家族ぐるみの入信が少なく、娘や息子への信仰継承が少ないのが特徴だと思われる。

(1)当時の教育事情は、山本禮子1999『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版を参照した。

4, 布教者のライフヒストリー

井上が主張するように新宗教の海外布教において現地の布教者の果たす役割は大きい⁽¹⁾。以下、断片的であるが、数名の布教者のライフヒストリーを紹介する。なお基本的に以下に記す内容は、調査項目を始めに立てて聞き取りを行ったものではなく、語り手が自由に話したいことを話す内容を記録することを目的としたやり方で行っているため、記述の厚み、あるいはユニットとしてのエピソードの統一性が取れていないことを断っておく。なお、これは布教者の人生において生長の家の信仰がどのように位置づけられているか、を知るための方法論的な意図に沿っているため、発表者自身は(ライフヒストリー法については頻りに批判されているが)充分意味ある資料であると考えている。なお以下の王承通氏のライフヒストリー以外は口述生活史であり、雑談を含めた会話の内容をまとめたものである。

1) 学校卒業後に日本の敗戦を迎えたコーホートに属する布教者

1, 王承通(1910~1988)←王恵美さん(長女)を中心に行った聞き取りから

台北生まれ、幼少の頃、活発で利発だったため、気に入られ、男子のいなかった王家へ養子に入る。王家は、台北市の中山北路2段の辺りから士林周辺の土地を所有する大地主だった。養父は阿片中毒で、財産のほとんどを彼の代で失っている。台北第二師範大学へ進学し、卒業後は基隆小学校に赴任する。師範学校在学時に谷口雅春の著作を台湾人の教師から紹介される。しかし、そのときは「人間神の子、病なし」という教えは馬鹿にして信じようとしなかった。それどころか、後に谷口の著作を読むまでその出来事は忘れてしまっていた。基隆小学校赴任時にその学校の校医の娘と結婚する。校医の家は客家だった。義父も妻も日本語が堪能であったため、家庭での会話には日本語が用いられた(養父は日本語を話せなかった。養家の親族や実家の親族とは交流が少なかったようだ)。基隆赴任時は義父の邸宅で生活していた。後に「国語家庭」にも登録し、改姓名にも積極的に応じている。義父も王自身も日本人の友人が多かった。義弟は日本の大学へ留学している。

基隆赴任中に『人を作る教育』(谷口雅春:1937)という本を偶然手に取る。その本は一晩で読み終えてしまったが、文中にありそうにもない話が多数掲載されていたため驚いた。「思ったままに現る」ということが強調されていたため、そこに興味を持ち、自ら実験することを思いついた。当時、煩っていた扁桃腺の治療のため、首には包帯を巻いていたが、これを外して「病はない」と念ずることを試みた。すると半信半疑の興味本位で行ったのにもかかわらず、長く煩っていた扁桃腺は数日のうちに治り、この効果でもって谷口の教えが正しいと考えるようになった。元々読書家であった彼は、谷口の著作を集中的に読み始め、やがて基隆で開かれていた誌友会を知り、参加を始めるようになる。

誌友会のメンバーはほとんどが日本人であった為、日本敗戦後、誌友会活動は頓挫する。終戦後は、生まれ故郷の台北市に家族と共に移住した。やがて谷口に手紙を送り、台湾人の信者を集めて誌友会活動を再開させる。その後、教団活動の再建に尽力し、信者の指導や書籍の流通経路の確保、翻訳活動に打ち込んだ。1950年代にニクキョクという大陸から来た宗教者を自宅に招き、同居を始める。彼はシャーマン的な霊能を持つ宗教的知識人だった。彼とも谷口の教えについて議論を行い、彼からも理解を得られた。政府の調査員から事情聴取を受けた経験もあるが、その調査員からは理解が得られ、活動を停止させられる事態には到らなかった。またこういった事件は信者の動揺を招くため死ぬまで公表しなかった。学校の校長や台北市の教育課長などの職歴を重ねたが、布教活動に専念するため、後に保険の勧誘の仕事に職を代え、晩年は国賓大飯店の日本語の先生を務めた。生命実相研究会として台北市政府に社団法人としての認可を受けた4年後、死去。没後は台湾人で唯一、生長の家功労者として国際本部の慰霊祭で供養された。李松蒲と共に現在の生長の家をつくった最大の功労者であり、ほとんどの布教者は彼から指導を受けている。6人の子供は、第三高女卒の長女以外、全員大学卒で、うち4家族がアメリカ在住。

2, 陳揚金枝(1916?年生まれ)

台北生まれ、物心が付く前にトンヤンシーとして陳家に入る。陳家は土建業を営んでいた。実父は台北市布袋区の区長を務めた地元の名士。幼い頃から両家の家族に可愛がってもらった。実兄は、早稲田大学、京都帝大、長崎医大に進学。養家の兄も法政大学に進学、養妹は台湾日々新聞社初の女性記者となった。彼女自身は女学校の受験に失敗し、「早稲田の高等女学校の通信講義録?」で勉強する。洋裁学校を出て、ドレスメーカーに就職。台北商業学校卒の夫と結婚。夫は日本海運に務める。日本海運に務めると出征しなくてもよいという特典があった。大戦末期は幼い子供を連れて疎開し、大変だった。陽明山の辺りから台北への空襲を眺めた記憶がある。終戦後、夫は台北信用組合に勤務、数年後に事業を立ち上げようとして独立するが、失敗。事業家で

あった叔父(台北工業学校の一期生で協志商会経営)から誘われて大同公資の経理を務める。日本海運時代に夫は李松蒲と知り合う。李松蒲に誘われて夫は生長の家の信者となる。自宅を誌友会に提供していた事情から、彼女も生長の家については早い時期から知っていたが、活動に参加し始めたのは、30年前から。はじめはあまり興味がなかったが、徐々に本を読み始め、誌友の人達と仲良くなるに連れ楽しくなり、熱心に誌友会活動へ参加するようになった。そこで第三高女に進学した公学校時代の友達と再会したりすることもあり、また新しい友達が出来たりして楽しくなった。谷口の著作は100冊ほど読み、現在は月に16回ほど教団へ通っている。誌友会に参加することは楽しみである。

彼女の育った地域は日本人居住区であり、日本への憧れ、好意が強い。総督府のパーティーで初めて日本料理を食べたときの感激や、台湾神社への皇太子のパレードへ旗をもって参加し、白馬の姿を見送ったときの話など熱のこもった口調で楽しげに話される。また「軍国主義はよかった(面もある?)」という話や日本軍が帰った後、これまで全くいなかった「泥棒」が頻発し、彼女の家も泥棒に入られた話、また、治安の問題が様々に起こった話、国民党軍は「ゴロツキ」が多かった話、二二八事件の話など、日本時代を懐かしみ、国民党の統治を呪う話をよくされる。また日本に旅行に行ったときのエピソードや、そこで日本人と間違われる話を楽しげに話される。天皇陛下を揶揄するような表現を調査者が用いたとき、厳しく叱責されたこともある。自分は日本人のようなものだし、日本が好きだ、ということをよく言われる。子供や孫はほとんど大学・大学院卒で2家族がアメリカに在住している。アメリカ育ちの孫は英語しか話せないの、孫のような年齢の調査者と話す楽しい、とよくおっしゃっていただいた。

いわゆる典型的な日本語族の一人といえるのではなからうか。

3, 張月華(1926? 生まれ)

新竹生まれ。一人娘。公学校時代(生徒は全て台湾人)に一人の日本人教師と親しくなる。両親は乗り気でなかったが、その教師は彼女の家庭を訪問し、彼女の女学校進学を説得する。その「先生のおかげで」新竹女学校へ入学できた。女学校時代は「突撃隊」というあだ名で、活発なキャラクターとして学校生活を送った。卒業後は教師へ。一時、教職に就いていた夫と職場で出会い、恋愛する。両親は養子をもらうべきだと言って結婚には反対したが、彼女は祖母に泣きつき、味方になってもらい、最終的には両親の許しを得て結婚した。教職についてすぐ、日本が敗戦し、北京語で授業を行うことになったので、同僚の教師たちと放課後、北京語を勉強した。

生長の家との出会いは、夫の事業の失敗と借金、そしてそれによる夫の生活態度の悪化がきっかけだった。一時は自殺を考えるほどの状況に陥った。夫の友人の妻であった曹宇の家で生長の家の存在を知り、彼女から王承通を紹介される。王承通からは「夫をたてる」指導を受けた。「台湾の習慣にはない(?)」教えであったため、驚いたが、王に言われたとおり、夫に感謝し、夫をたてる行いを心がけていたところ、夫の生活態度は治り、状況は次第に好転した。これが契機となって熱心な信者となる。その後、谷口の著作の熱心な読者となり、学校の現場で「生命教育」の実践を志した。当時の台湾の教育現場では「スパルタ式」の教育が主流であった。全ての子供を「神の子」とみて、積極的に褒め、よいところを伸ばすという教育法は、当初、同僚からの理解が得られなかった。しかし、数々の問題児の改善に実績をあげ、自らも自信を深めると共に、やがて同僚からの評価も得られるようになった。

教職を退職した後、王からの薦めで台中地域の布教を開始する。仏教寺院で教育問題について講演を行って感触を掴んだ後、知り合いの車に乗せてもらい、2週間に1度のペースで定期的に講演会を開いた。やがて台中で戦前から信仰を続けてきたグループと合流し、台中支部の発展に尽力した。また劉黃素琴が布教を開始した高雄へも指導に赴いた。現在は、台北支部長を務めている。

生長の家の活動以外にも日本舞踊のサークルに所属しており、ゲートボールもやる。日本へも何度も旅行しており、女学校時代の同級生と親しくしている。家庭には、観音が祀られてあり、息子は熱心な仏教信者。

4, 曹宇(1918年? 生まれ)

台北生まれ? 公学校時代から優等生だった。学校時代から俳句が趣味で、賞を受けたことも何度かある。女学校(?)時代に、授業中、日本人教師が日本人の学生に対し、「日本人のくせに本島人に負けて悔しくないのか」と叱咤した言葉に傷ついた思い出がある。

生長の家を信仰するようになったのは、夫の病気がきっかけ。夫が癌を宣告され、(誰から?)王承通を紹介される。王から生長の家の「病はない」「病は心の影」の教えを指導されるが、なかなか納得できず、疑問を率直にぶつけ、幾度か議論となった。当初は納得いかなかった教えも、最終的には納得し、信仰を持つに至る。夫の病状と事態が好転することはなかったが、心の持ち方を変えることによって日々の現実が受け入れられるようになった。王からの薦めもあって自らの体験から得られた教えの理解を基にママ教室の講師を始める。やがて洪徳馨

の活動を支持し、生命実相研究会の活動には距離を取っていたが、洪の死後、中華民国生長之家伝導教会の活動に合流する。現中華民国生長之家伝導教会理事長。

5, 劉黄素琴(1930年?生まれ)

台北生まれ。第三高女卒。教職経験者。父親は王承通の師範学校の先輩に当たり、母親は王の妻の女学校時代の同級生。素琴よりも母親が先に入信している。母親の入信のきっかけは、夫が事業に失敗し、さらに教え子に貸した借金が帰ってこないため、悩んでいたところ、偶然、台北の市場で王の妻と出会い、四方山話からこの事情も話したところ、夫(承通)が生長の家という宗教をやっているから一度話をしてみないか、と話を振られたことがきっかけ。素琴の母に対し王承通は、教え子に貸した金をあてにすることをやめ、はじめから金など貸していないと思うように指導した。王の言葉にはじめは反発があったようだが、素琴の母は、王に言われたとおり、教え子への督促を止め、金を貸していることを忘れるように務めた。するとやがて夫の事業が好転し、教え子も貸した金を持ってあやまりに来た。素琴はこの一連の経過を眺めていて非常に感心したが、自ら入信はしなかった。彼女が入信したきっかけは、結婚後の姑との衝突がきっかけである。姑と折り合いが付かず、悩んでいたところ、母親から王の下へ相談に行くことを薦められた。王は、姑の悪いところを見ず、まず感謝の念を持って接しなさい、と指導した。言われたとおり、常に感謝の言葉を姑にかけ、何を言われてもありがとうございます、と応えるようにした。すると姑の態度は軟化し、姑との関係は好転した。感動して生長の家の信者となった。

やがて夫の転勤で高雄に赴くことになったとき、王から高雄での布教を薦められる。高雄では、始め何から手をつけてよいかわからない状態だったが、近所で知り合った友人に話を振ってみたところ、教えは何も知らないが、素琴の人間性を信用するからということで協力してもらえることになった。近所の学習塾の教室を借り、参加者は近所の茶道教室の参加者に来てもらうことにして第一回目の誌友会を開催した。なかなか好評だったため、2週間に1回、台中に布教に来ていた張月華に高雄まで来てくれるように頼み、月華に講話を頼み、誌友会を継続させていくことにした。誌友会は、知り合いを誘い合っただけで参加者が増え、現在の高雄支部の活動に繋がった。高雄支部は、布教を開始した時期が遅かったため若い信者が多い。やがて台北に戻り、(前)中華民国生長之家伝導教会理事長を務める。

2, 在学中に日本の敗戦を経験したコーホートに属する布教者

6, 王恵美(1932年生まれ)

王承通の長女として基隆に生まれる。日本人子女が通う双葉尋常小学校に入学。家庭は国語家庭で生活言語も日本語。改正名後は松岡恵美子という名で育つ。基隆高等女学校に進学。学校時代は活発な優等生だった。高等女学校の2年生の時に日本の敗戦を迎える。予想だにしていなかった事態だったため、上手く事態が飲み込めなかった。父親に連れられて一家は台北へ移住。元の第三高女、台湾省立第二女子中学校へ編入した。そこでカルチャーショックを受ける。初めて日本人がいない環境に立ち会った。また台湾語が全く話せなかったのが会話が出来なかった。周りの人間もなぜ日本人が転校してきたのか訝しがっている様子だった。授業もわからず、登校する気がなくなり、不登校を繰り返すようになる。1学期の間、親にばれないように不登校を続けた。やがて学校側から家庭へ連絡が来て登校を再開させるが、全てのことにやる気を失ってしまった。特に基隆港で出迎えた国民党軍のみすばらしい姿が目には焼き付いており、自分が彼らと同じ「中国人」だとは思わなかった。これまで学校で「チャンコロ」などという「優越意識」をもって眺めていた存在と自分が同じだという現実を受け入れられなかった。自分は日本人だと思っていた。唯一同じ境遇で育った友人も白色テロを恐れて一家でアメリカへ亡命してしまい、話を理解してくれる人間が誰もいなくなってしまった。誰からも理解されない悩みと苦しみを抱き、自殺を考えたことが幾たびかあった。しかし親が悲しむことを考えると最後の一线を踏み越えることが出来なかった。

幼い頃から読書好きだったが、この鬱屈した日々父親の書齋にあった生長の家の書籍を読み始める。谷口の教理はすんなり理解できた。自分が苦しんでいる現実、現象に囚われたものの見方によっているのだから、心の原形を清め、正しく実相を捉えれば、そこには無限供給に溢れる完全円満の世界しかありえず、苦しみはない。この教えを読むと心が落ち着き、死にたいという気持ちはなくなってきたが、それでも「頭でそうだと思っただけで」「なんで日本は負けたんだ」という気持ちが消えることはなかった。

卒業後は進学も就職もせず、家に引きこもっていた。結婚もしなかった。人と接したくなかった。やがて自宅で開かれるようになった誌友会に時々顔を出すようになり、父親の薦めで台湾語や北京語を使わなくても出来る『生命の実相』の輪読会の講師を始めた。

父親の死後、不思議な体験を経験し、それがきっかけで日本の宇治で開かれた練成会に参加した。そのとき参加していた若者達の声が、自分の信仰心を反省させるきっかけとなった。これまで自分が教えを理解している

つもりでいたが、「本当には」教えがわかっていないことに気が付いた。親への感謝を本当にはしていないことに気が付いた。この反省が契機となって積極的に教団活動に参加し始めた。

その後、理事や役職を連続して務めた。ただしこの体験を他の誌友に話したことはない。

7、陳林秀美(1935年生まれ)

鶯歌生まれ。小学校(公学校)3年まで日本教育を受ける。4年以降は中国語の授業。物心がつく前にトンヤンシーで陳家へ。実家は炭坑関係の仕事、養家は鶯歌有数の地主だった。養家の両親は熱心なキリスト教徒で、実家の両親は台湾の伝統的な「仏教」徒だった。小学校の低学年頃、実母から仏教寺院に連れていかれ、「キリスト教は拝まない」「これでは駄目だ」と教えられる。たびたび実母は養母の信仰を非難した。養母は実の子のように自分を可愛がってくれていた。どちらも裏切ることが出来ず、宗教の板挟みとなってしまふ。

やがて土地改革の影響を受け、多くの土地を失い、また、養父は慣れない事業に出資し、失敗した。しかし、彼はそれまでの贅沢な生活を止めることが出来ず、陳家は没落の一途を辿った。幼少の頃、陳家には無かった日本語の本がおばさんの家にはたくさんあった。当時、それが読みたくてたまらず、読ませてくれ、とお願いしたが、冷たく断られてしまふ。しかし、どうしてもそれが読みたくてたまらず、おばさんの目を盗んでは学校帰りに見つからないようにあがり込んで、夕日を明かりに読書を続けた。この独学のお陰で日本語を読み書きできるようになった。

学校を卒業した後、養家の兄と結婚し、2人で布の商売を始める。台北で仕入れ、鶯歌で売った。子育てと仕事に明け暮れる日々を過ごしていたが、ある日、台北の日本語書店、鴻儒堂で生長の家の書籍を手取る。中には「万教帰一」という言葉が書かれていた。この言葉が目飛び込んできたとき、「涙が溢れてきた」。幼い頃から抱いていた宗教と両親を巡る葛藤、「私の難題が解けてくれるのはこれだけしかない」と「直感的に思った」。「砂漠で湖を発見したような」喜びで、書店の店長経由で王と李の主催する誌友会を訪れ、入信した。王の指導でどちらの宗教も正しく、両方とも大事にするべきことを学んだ。また、親への感謝が何より大切であることを学んだ。そして今までの困難は、自分をこの「真理」に気付かせるため、神様が私に「試練」として与えてくれていたのだということに気が付いた。試練が大きいとは使命が大きいということである。自らの体験を基に伝道活動に積極的に取り組むことを決意した。

前台北支部長。

3、光復後のコーホートに属する布教者

8、周雲卿(1951年?生まれ)

台北生まれ。両親は本省人。学校教育では戦前の日本軍の悪行を教えられたが、家で聞く話と違った為、それほど印象には残らず、日本に対して悪い印象は持っていなかった。生長の家への入信前は宗教には全く関心がなかった。入信のきっかけは夫の事故死。1989年に交通事故で夫を亡くす。当時、残された子供は14歳と10歳だった。悲しみと将来への不安で精神的に参っていたとき、親戚から生長の家の個人指導を薦められる。何もやる気は起きなかったが、熱心に薦められるので行ってみた。しかし、曹宇と会ったとき、なぜだかわからないが涙が止まらなかった。その後も曹宇の元へカウンセリングを受けるような形で会いに行った。そのたびに自分の性格を言い当てられる不思議な経験をした。また曹宇のもとに通うたびに自分の自信が回復してくるのがわかった。やがて生長の家の教えに興味を抱き、より深く理解するために日本語の勉強も始めた。

現台北青年部長

9、陳柏宏(1964年?生まれ)

父親は外省人、母親は本省人。5人兄弟の長男。幼い頃から両親に自分があまり大事にされていないと感じていた。幼い頃から子供が好きで、自分が子供から好かれやすいことも知っていた。大学に進学し、教師になる夢を持っていた。しかし1年目の受験で失敗してしまふ。両親に浪人させて欲しいと頼んだが、両親は了承せず、専門学校へ進学させた。彼はこれには不満で納得がいかなかった。しかたなく専門学校へ進み、やがて徴兵された。

生長の家の存在を知ったのは、徴兵の休暇期間中に母親が道教寺院から持ち帰った雑誌を見たことがきっかけである。母親はそれを読まなかったが、教育についての内容であった為、興味を持ち読んだ。大変感銘を受け、電話でこの本を問い合わせた。地方講師が電話に出て、興味のある内容だったら伝導教会に来なさい、と誘いを受けた。

伝導教会に通うようになったが、盗まれたバイクが返ってくるという不思議な体験を経験する。やがて教えを深く理解するために日本語の勉強をはじめ、日本の練成会にも参加した。日本の練成会(宇治)では、「お父さん、お母さん、ありがとう」と唱えながら畳を拭くという浄心行があった。畳を拭いているとき、幼い頃からの親に対する

わだかまりが心に浮かび、自分がどれだけ親に感謝する気持ちが足りなかったか、親の気持ちを考えたことがなかったか、考えさせられ、自然に涙が溢れてきた。心からお父さん、お母さんありがとう、という気持ちが湧いてきて、自分を改めようと思った。

就職していた会社を辞め、教団職員として働くことを決意した。教化総長の秘書として勤務。

以上が台湾生長の家の教団活動の歴史と現在の概況、そして布教者のライフヒストリーである。1の王承通は無試験で本部から講師資格を授与され、2・3・4・6・7の人物は、1982年と1983年の受験で講師資格を取得している。5・8・9の人物は、受験再開後の1年目である1994年の受験で講師資格を取得している。いずれも積極的に信者の指導に当たっている人物である。断片的で調査法上の問題があることは考慮せねばならないが、実質的に彼らの教義理解が中華民国生長之家伝導教会の活動に大きな影響を与えている事実は重要である。

(1)前掲[井上1985]を参照のこと。

5、受容の様態を規定した要因

これから先行する研究が提出した仮説を軸に考察を加えていきたい。

→中牧弘允仮説

①＝ブラジル人と台湾人との違い。ウンバンダあるいはエスペリティズモと生長の家の信念体系は親和性があるかも知れないが、他力主義と自力主義の問題をこの仮説は括弧に入れている。

→漢民族の祖先祭祀を中心とする靈魂観念と生長の家の信念体系には親和性がないわけではない⁽¹⁾。

神明・鬼魂・祖先→靈魂の死後存続を主張しているが、神懸かりと悟道の区別を明確に行い後者を支持している。「靈界人の憑依」の現象は否定しないが、大本的な操靈術は否定。基本的には「自己の本性の大覚」こそが重要であり、現象に惑わされるな⁽²⁾と説く。

神明のパンテオン→靈圏の最下層＝地獄、浮浪靈の世界、靈魂の落ち着くべき靈圏、という単純な3区分を行う。「唯心を現す過程の一部として善思念が善靈を呼びむかえ、善靈の運命の修復力を利用するという心靈学的解釈も追加⁽³⁾」することは支持。

祖先祭祀のルール→普段の誌友会における講師の指導の他に、年に2度開催される練成会でも先祖供養の教えは重要な意義を持つものとして説教・講演の時間がとられる。「靈祭の儀礼には必ずしも一定の形式はない」と指導する。谷口は「祖先または自分に関心ある靈魂の想念は、その子孫に影響を与えるので、祖先が好まないところを子孫が行えば、祖先あるいは縁者の靈魂の反対観念を受けてその人の運命が妨げられ、順調に進まなくなることもある⁽⁴⁾」と説く。

鬼魂の存在→「神と人間とは一体なり」という人間の神聖性を強調する教えの根本からすると「苦しめる靈は第一義的存在にあらず、彼らはあやまれる信念によりて流転せる迷の影なり⁽⁵⁾」と説かれる。ただし谷口は「無縁仏は個人では祀らない方がよい⁽⁶⁾」と述べている。ただし鬼の供養は多くの信者が行っている。

※台湾人の嗜好とあうと完全にいえるわけではない→特に、心なおしの自力主義。「感謝」の挨拶。

筆者の調査した限りでは各家庭の祭壇は維持されており、そこでは観音などの祭神の隣に谷口の写真や「実相」額等が飾られている(写真1)。万教帰一を唱える生長の家の教えは、伝統宗教の価値規範や慣習行動との衝突を回避させるが、これが逆に「家の宗教」あるいは「家庭の宗教」とはならず、「個人の宗教」の域に留まらせる一因となっている事態も観察できる。教団の指導者層である講師陣であつても家族ぐるみで教団行事に参加する人々は少ない

②＝基本的に日系社会の存在しない地域であるが、言語戦略は非常に重要。

むしろ北京語対応が遅れたため、教勢の伸びの停滞を招いた。

③＝他宗教寛容の教えであるが、排他的な創価学会が教勢を伸ばしている事態を考慮に入れるとこれが順機能を果たしたとはいえない。

④＝人生哲学と打ち出したわけではなかったが、当初の信者は戦前の日本的な忠孝一致の道徳に惹かれていたことも想定できる。ライフヒストリー2の人物は明確にそれを支持。

⑤＝病気治しの教えは打ち出していた。倫理宗教としても打ち出していた。

→島藪仮説:その1

①＝日本語世代で高い学歴の人々は日本語と日本文化に馴染んでおり、好意的な眼差しがある。しかしこ

れが教勢を妨げる原因になったことも想定される。誌友会におけるインタビューでは、「谷口先生の本が日本語で読めないと本当には生長の家の真理はわからない」という言葉が頻出する。しっかりとした教義理解を奨励していた王と李の指導→日本語を読めない人々にはなかなか広がっていかない。戦後世代への近年の教勢拡大を眺めると国民党の反日教育がどのような影響を与えているかは、よくわからない点がある。

文化的・政治的条件については、戦後史が重要。戒厳令下の厳しい活動条件下では教勢は停滞していた。ただし教団に参加せずとも生長の家関係の書籍を目にした人は相対的に多かった。文化的状況も教育の転換と民主化の問題が重要。ただし教団レベル(メゾ・レベル)の問題に政治・文化の問題(マクロレベル)は大きく関わってくるが、ライフストーリーのレベル(ミクロなレベル)に降りてくる部分では、こういう問題のたて方は、背景的なpull要因として機能しているのみで、多くの事例を直接的なpush要因として分析することはできない。ライフストーリー6の事例がダイレクトにこの問題と関わっている。

- ②=まず、台湾で大規模な工業化、都市化が進んだ1960年代に生長の家の教勢の拡大は見られなかった。台湾島における離村向都の人口移動のピークは、製造業が急速に発展した1960年代後半という時期である⁽⁷⁾。しかし、繰り返しになるがこの時期に教勢の拡大は見られなかった。むしろ重要な点は、生長の家の初期信者が既に戦前から都市に在住していた人々であったという点であり、この人々を核として職場や学校の同窓というヨコのラインで教線は拡大していった点である。

=ジョーダン仮説とかけあわせる。

①については、農村における民間信仰の寺廟の施設拡充と生長の家の教団施設の拡充とはリンクしない。定期的な時間と場所を確保した教団行事は、1970年代に再開されたが、場所は王承通が自宅を改築して用意した教室を利用した。それまでは、李松蒲の建築事務所や誌友の自宅や会社の一室を不定期に移動しており、これは政府の検挙を逃れる事情から要請されたものであった。伝導教団の本部として1998年まで利用された台北市内(錦州街)のビルの一室は、誌友の一人が無料貸与していたものであり、1999年から使用されている本部(承德路)は、1992年の伝導教会発足時から積み立てられていた資金に借金を足して購入されたものである。上述したように生命実相研究会発足以前は、会費の徴収すらなかったものであり、財産の増加と教団施設の拡充には直接的な関係はない。そもそも初期信者は裕福な人々のサークルであった。

②は、マクロな視点からいえば相関性があるだろう。調査資料から直接的な関連性は指摘できない。ライフストーリー7の事例には土地改革による家の没落が語られているが信仰受容との関係はない。また医療制度の問題も生長の家の誌友会では病気が治ったという体験談の報告は後を絶たない。

③の視点との関係であるが、戦後の教育水準の向上と多様な宗教情報の広まりが、1980年代以降の生長の家の教勢拡大に背景的要因として機能した可能性はあるが、初期誌友層の社会的属性と日本語リテラシー、そして教団活動の連続性を考慮するとこれがダイレクトに影響したのとは考えられない。むしろ創価学会や真如苑等のように伝導初期から中国語(戦後世代向け)の布教言語を用意した教団と較べると、生長の家は現状では教勢においては遅れをとっている事態は重要である。また谷口の科学を強調する教理も半世紀以上前に書かれたものであり、競合するニューエイジ系のテキストに対しどれほど魅力を与えるかは疑問である。

④についても、直接的な相関性は指摘できない。確かにここ数年間で教線が東部の農村地帯等へも伸び、交通機関の発達も教勢拡大を後押ししている事態は指摘できる。しかし、台湾全土の誌友を対象にしている練成会は、移動の不自由さから1990年代の末には一時期ほどの参加者を集められなくなった(2000年9月の聞き取りでは300人程度の参加)。練成会は、台北(年1回)と台中・高雄(2年に1回)で交互に開かれているが、参加者はそれぞれが所属している支部に近い練成会に1年に1度参加するというのが熱心な誌友であっても実状のようである。

→島菌仮説:その2

- ①=生長の家には、上述した神想観の他に聖經読誦と呼ばれる行がある。神想観、あるいは聖經読誦を実践したことで現世利益が得られたという報告は、誌友会でもたびたび報告される。筆者の参与観察中も、神想観、あるいは聖經読誦を行ったことで、娘の病気が治った、皮膚病が治った、心臓の持病が治った、等といった体験談が発表された。こういった一種の呪術的实践は、布教の武器として機能していることは確実である(ただし教団の指導においては、日常生活において全てのことに感謝の念を持って生きる、という心なおしの実践の副次的実践として位置づけられており、体験談の話者も、いかに自分が心を入れ替え、そして神想観や聖經読誦も欠かさずやったか、というプロットで体験を綴っていたことを付記しておく)。また『甘露の法

雨』を所持していたことによる奇跡譚も数話聴いた。興味深いところでは、林檎の樹に『甘露の法雨』を巻き付けた結果、その年の生育がよくなったという話を聴いた。

ただしこの島藪が「単純明快」と述べる呪術的实践に関しても、信者の意識に亀裂を生む複雑な事態を引き起こしている。それは神想観を日本語で行うか、北京語で行うか、そして聖經読誦を台湾語で行うか、北京語で行うか、という問題に起因している。多くの古参信者、つまり年輩の信者は、神想観を日本語で行い、やり方も神道式のそれを踏襲している。それに対し、新参信者は国際本部の方針を受けた伝導教会の指導に従い北京語でこれを行っている。北京語の神想観では「ウユウ」という気合が削除されている。「ウユウ」という気合は、谷口思想を反映した重要な行であり⁽⁸⁾、削除するべきではないと考える古参信者は少なくないが、日本の国際本部は、日本(神道)的な文化特殊性から脱皮し、北京語世代への教線拡大を成功させたいという思惑がある。日本教育を受け、神道式のやり方にも馴染みを持つと共に、戒厳令下の厳しい時代を経験し、日本本部の指導を長らく受けてこなかった古参信者は、よりファンダメンタリスティックに忠実な形で谷口の教えを守っている部分がある。

この頑なな意識は、生長の家の教団活動を一般の台湾人へは神道色の強い団体だと認識させる事態を来たし、また北京語世代へは、教団儀礼が簡単なものだと捉えにくくさせる結果を招いている。

また聖經読誦を古参信者は王承通が翻訳したもので行っている。近年、国際本部は、台湾文化に色濃く染まった王の翻訳ではなく、北京語でより日本語原文の直訳に近い内容のテキストを導入した。しかし、この翻訳は古参信者の間では評判が芳しくない。当然、北京語を話せない戦前世代にとって新しいテキストは非常に馴染みにくいという事情がある。なお1996年9月に台北の青年部の集会に参与観察を行ったときには聖經読誦が実施されていたが、1997年3月以降に参与観察を行った際にはこれは省略されていた(これは笑的練習一笑いの練習一も)。青年部に関しては、この呪術的な教えが、必ずしも布教の武器とはならない、あるいは魅力的な教えには映らない、と認識されている。

③=この問題も同様である。現在続々と『生命の実相』の翻訳が進められているが、翻訳文に不満をもつ古参信者が少なくない。調査中は「日本語でなければ谷口先生の文章の深いところはわからない」という意見をよく耳にした。ただし、生長の家の文章は周知のように論理的、かつ体系的なものであり、翻訳は他の新宗教と較べ容易である。また、日本語のニュアンスに依存する箇所が少ない。③の効果は、今後の教勢の伸びとの関係を考慮に入れねばならず、早急な結論は避けるべきであろうが、現在のところ、北京語の翻訳が出てから確実に若年信者は増加しているので、現時点では受容の順機能を果たしているとは判断できるだろう。

④=これについては、上述した内容と重複するので簡単に述べたい。多宗教への寛容の教えは、順機能も果たすがそう機能しない場合もある。排他的に生長の家の教えの優位性を主張せねば、信仰伝達は上手く進まないケースがある。それが典型的に現れているのが親→子の信仰伝達である。講師資格を得ている二世信者は非常に少ない。これは生活言語に起因する使用言語の問題が非常に大きいのだが、古参信者やその布教ネットワークから入会した老年信者が現在では大変な高齢であるのに対し、世襲的信仰継承が少ないのは、他宗教寛容の教えも大きく関係しているように思われる。

(1)台湾の伝統的な祖先祭祀と祭祀組織については、末成道男1977「漢族の祖先祭祀—中部台湾の事例より—」『聖心女子大学論叢』50、植野弘子1989「台湾漢人社会の祖先祭祀—家族と宗族の祭祀をめぐって—」渡辺欣雄編『祖先祭祀』凱風社等を参照した。台湾の民族宗教については、増田福太郎1939『台湾の宗教—農村を中心とする宗教研究』養賢堂、渡辺欣雄1991『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房等を参照した。なお台湾における民間信仰の文献目録として林美容・三尾裕子編1998『台湾民間信仰研究文献目録』風響社、林美容編1999『台湾民間信仰研究書目 増訂版』中央研究院民族学研究所がある。

(2)谷口雅春1963『【頭注版】生命の実相 第9巻』日本教文社、51頁。

(3)『甘露の法雨』並びに、前掲[谷口1963]、88頁、108頁。

(4)谷口雅春1974『人生を支配する先祖供養』日本教文社、15頁。

(5)『甘露の法雨』。

(6)前掲[谷口1974]、24頁。

(7)台湾における工業化・都市化、それに伴う親族・家族構造の変化については戴國輝編1986『もっと知りたい台湾(第一版)』弘文堂を参照した。

(8)「気合に二通りあって、一つはイエツと短く区切る気合で、これは相手を殺す気合だ。もう一つはイユウと一度中にもってそれから生命が湧き出てくる気合、これは相手を生かす気合だ。一中略一イは生命の言葉でユは湧き出ずるという意味」だという記述がある(谷口雅春1970『詳説 神想観』日本教文社、78頁)。

5. むすび

以上、やや饒舌な発表であったかもしれないが、中牧と島藪の提出した仮説を軸にして、台湾における生長の家の受容の様態を規定した要因を、教義と社会・歴史的な問題と教団活動と誌友の属性と意識の事例から探っ

てきた。

やはり、大きな問題はメゾレベルでは、宗教統制を巡る戦後の戒厳令の問題であり、マイクロレベルでは、日本語リテラシーと日本文化への馴染みの問題である。特に中華民国生長之家伝導教会の事例においては初期信者層に高いレベルで日本教育を受けた人々の割合が多いことがポイントと言える。

また、最後に述べておきたいのは、以上の記述では上手く描き出せなかったが、教団の日本語リテラシーを有する古参信者層と北京語世代の新参信者層の間には、教団の教えの解釈に大きなギャップがある。これは、選挙を通して理事会の運営にそのまま反映され、教団活動のあり方にも大きな影響を与える。

古参信者層の意見を代弁する理事と新参信者層の意見を代弁する理事との間には少なからぬ確執があり、これは日本本部との関係の問題も絡まって複雑な対立構造を醸造している。詳述することは避けるが、戦前から古参信者であった台中の沈木青と彼のシンパは中華民国生長之家伝導教会の活動から離脱している。生長の家の台湾支部という小さな組織であってもそこで思想の統一、教義解釈の合意を得ることは困難であり、つまり、決して一枚岩の教団活動が行われているわけではない。これは教団活動の歴史が長いことに遠因があるが、1980年代以降も（現在は合流している）洪徳馨のグループが独立して活動を行ってきた事情も絡んでいる。また、教団本部の指導方針の変化に台湾の古参信者が取り残されているという事情も大きい。これは、教団本部から孤立した形で誌友会が継続されていた事情と谷口や王という指導者の不在という事態が大きく影響を与えている。

追記

中華民国生長之家伝導教会への調査の段階では、大下貞雄教化総長、王恵美氏、陳林秀美氏、陳楊金枝氏、周雲卿氏、陳柏宏氏、張月華氏、劉黄素琴氏、許月英氏、陳林愛恭氏、松岡富士子氏、曹宇氏、そして国際本部の曾福人氏、以上の方々に特に御世話になった。また、調査、文献収集の段階では藤井健志氏から多くの指導を受けた。また五十嵐真子氏からも文献の紹介を受けた。なお、調査時に簡子夔氏、陳宗之氏、鈴木恵氏、佐藤美幸氏、江端義高氏を始めとする多くの方々の協力を受けたことを記しておく。上記の方々へは深く感謝します。